

CNALレポート・ジャパン

Conferencing industry News report, research & Analysis - CNA Report Japan

発行日：毎月 10 日・20 日・月末
創刊日：1999 年 12 月 8 日
編集 / 発行：橋本 啓介

テレビ会議・ウェブ会議・電話会議システム専門

2006 年 2 月 プロダクトレポート

編集:editor@cna.jp 広告:pr@cna.jp 読者登録:<http://cna.jp>

Copyright 2006 CNA Report Japan. All rights reserved.

プロダクトレポート

Visual Nexus プロダクトレポート



トーマンサイバービジネスは、IP ネットワーク多地点ビデオ会議システム Visual Nexus のバージョン 3.0 を昨年 10 月にリリースし、海外展開も強化を図っているが、今回同社 インターネットプロダクツ事業部 マーケティンググループ 主事補 丸田 雄介氏に、Visual Nexus の製品としての特長、強みなどを伺った。

トーマンサイバービジネス株式会社
インターネットプロダクツ事業部
マーケティンググループ 主事補 丸田 雄介氏

Visual Nexus バージョン 3.0 - デスクトップに最適化したコミュニケーションツール

バージョン 3.0 では今までのバージョンから、オーバーホール的に見直しをした。リセットしたような感じだと丸田氏は言う。今までとは画面のインターフェイスも全然違う。以前のバージョンは画面一杯に占有するタイプだった。ビデオ会議のイメージから当初の Visual Nexus の製品化がなされているため、そのような設計思想が反映した形であった。

しかし、バージョン 3.0 からはビデオ会議という切り口に加え、ユーザーに対する新しい提案を盛り込んだ。そのため設計思想からユーザーインターフェイスの作りまで、新たに Visual Nexus を生まれ変わらせたという感じだ。

Visual Nexus をビデオ会議という位置づけではなく、PC

の上でメールをみたり、オフィスツールを立ち上げたり、相手の在席状態(プレゼンス)をみたりしながら、コミュニケーションが行えるツールとして生まれ変わった。言い換えれば、デスクトップに最適化したコミュニケーションツールとなった。

ミーティングをコントロールする Meeting Manager、実際に通話している相手の画面、データ共有画面のそれぞれを分離して、ユーザーは、デスクトップ上の好きなところに配置できるため、PC の画面一杯を占有することがなく、必要なデータを見ながら会話をすることができる。

「3.0 になってユーザーインターフェイスが変更になり、当初戸惑った既存ユーザーもいたが、そのユーザーも含めて、Visual Nexus バージョン 3.0 の評価は、以前よりも格段に上がったと実感している。」(トーマンサイバービジネス株式会社 インターネットプロダクツ事業部 マーケティンググループ 主事補 丸田 雄介氏)

「ビデオ会議の枠の中にあつたら、ユーザーの意識も使われ方も変わらない。使う人の意識まで変えてしまう、もっと言えば、ビデオ会議と思っていたのにビデオ会議ではない。そうゆう所まで根ざした変更をしている。この点に関して、今回のバージョンアップについて我々は野心的に取り組んだ。」「使い始めれば意識がかわると思う。ビデオ会議業界ではこういった方向に走っているベンダーは非常に少ない。ウェブ会議に近いのかもしれない。それを引っ張っていきたい。」(同丸田氏)

「今度はコミュニケーションのやり方を根本から変える。当初はビデオ会議から始まったが、コミュニケーション全般をサポートするようなシステム、ソリューションを目指したい。」「バージョン 3.0 での製品全般のメッセージとしては、プレゼンスを中心としてどれだけすばやく相手とコミュニケーションを行える環境を持てるか。どれだけ意志を共有して、話をする事ができるか。この製品を使うとどうなるの。これを使うと何が変わ

るのか、どのように環境が変わるのということをお客様に説明していきたい。また、業界にインパクトを与えていきたい。」(同 丸田氏)

バージョン 3.0 は、海外でも同社のイギリスの法人 Visual Nexus

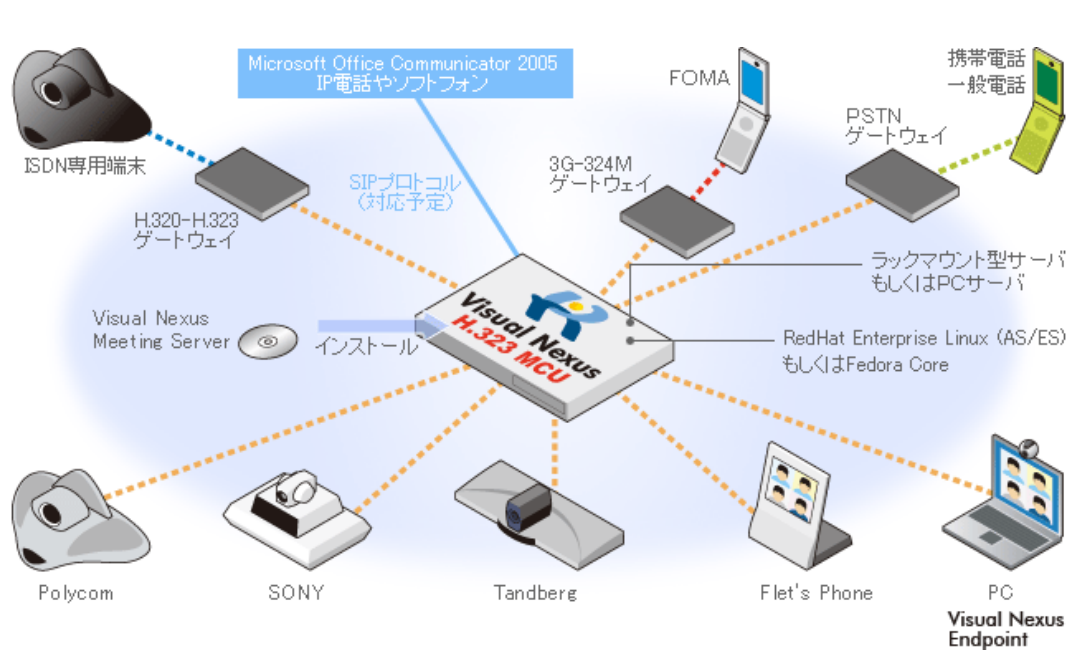
Limited からリリースされた。バージョン 3.0 のユーザーインターフェイスは、ワールドワイドの市場を意識して海外でデザインしたと

いう。「英語版の Visual Nexus 3.0 のリリースと同時に、世界各国から引き合いが急増している。ASP 業者からの引き合いも多い。」(同 丸田氏)

Meeting Server - MCU をコアとしゲートキーパー、予約管理システム、データ会議機能を統合し、国際標準準拠 & 大規模導入に対応

Visual Nexus は、ビデオ会議という面から見ても、ウェブ会議という側面から見ても、両方のよい面を持っている、まさに、Best of Breed な製品だ。ビデオ会議のイメージからみると、MCU がコアになる訳だが、Visual Nexus は、国際標準の H.323 に準拠している。また、自社で開発した PC ソフトウェアの Visual Nexus Meeting Manager の他、H.323 に対応していれば接続可能な端末のベンダー、機種を問わない、マルチベンダソリューションを提供していることだ。最近では、MCU をキーにして製品を投入しているベンダーを

見受けられることもあり、Visual Nexus の MCU としては、H.323 で行うビデオ会議をすべてサポートすることがポイントと考え他社メーカーの製品との接続性を高める努力をしている。



その MCU の機能を提供する Visual Nexus Meeting Server は、単に MCU の機能を提供しているだけではなく、他社では別売りになっていることが多いゲートキー

パー、会議予約管理システム、T.120 (データ会議) などの機能を標準で搭載している。これらの要素がひとつになってミーティングをコントロールすることで Meeting Server という名称があるのだが、映像・音声・データを使ってミーティングを行いたいという要求に対して一つの製品で提供出来る強みが Visual Nexus にはある。

さらに、MCU 単体のスペックで見た場合、MCU を複数台数連携させる、カスケード接続をすることによって、非常に大規模なビデオ会議の需要にもスケラブルに対応できる。「大規模構成に要求される安定性も重要だ。それを備えた Visual Nexus は、過去3年間の MCU としての販売実績は、国内で最上位レベルにあると思う。」(同 丸田氏)

Meeting Server - ソフトウェア MCU の強み

MCU というと従来のイメージは、ハードウェアだが、Meeting Server は、ソフトウェアで開発されている。丸田氏は、ソフトウ

ウェアで行う意義をこう説明する。「ソフトウェアで行う意義は、機能要望に対して、即座に対応できるという強みにある。」また、システム拡張も柔軟に行える。たとえば、ハードウェアの MCU だと、現状接続可能なビデオ会議端末が 10 台で使用していても、将来台数が増えた場合に、MCU のハードウェアを買い足す必要が出てくる。

それに対して、Visual Nexus は、ライセンスを追加するだけで台数増に対応できる。サーバーのマシンのスペックにも連動してくるが、ライセンスキーを追加するだけで需要の増加に簡単に対応できる。「ここはソフトウェアならではの強みと思っている。」(同 丸田氏)

Meeting Server は、リナックスのサーバーにインストールするソフトウェア MCU である。リナックスの一つの特徴は OS として円熟していて安定しているということ。安定したリナックス OS 上で稼働しているので MCU のように安定性のもとめられる性格の製品には適した OS と見る。

MCU の性能については、同時に何台接続できるかは、CPU のパワーにも依存してはいるが、その時市販で手に入るベストなハードウェアサーバーを購入すれば非常によいスペックで Meeting Server を運用できる。

「極端な話、台数を増やしたいという時に、このスペックのハードウェアサーバーではつなげられない場合は、MCU のライセンスは買い直す必要はない。サーバーのスペックを代えるだけで MCU のスペックが上げられる。」(同丸田氏)

ソフトウェアのバージョンアップによって追加された機能の一例としては、Visual Nexus バージョン 1.0 では搭載していなかった予約管理システムがあり、ユーザーからの要望に応じて、後のバージョン 2.0 から製品の標準機能として搭載している。早いペースで新しいバージョンを投入できるのはソフトウェアであるからだ。

Meeting Server - ゲートキーパー機能の強化

Visual Nexus は、外部のゲートキーパーと連携する機能

を、バージョン 3.0 で強化している。

「日本では、ゲートキーパーは今後急速に普及すると思うが、外国では、グローバル展開する企業ですでに自社でゲートキーパーを何台か運用していて、地域毎にその地域の個別の端末を管理していることがあった。そういったところに Visual Nexus を投入していくとなると他のゲートキーパーとの連携機能が重要になってくる。」(同 丸田氏)

ゲートキーパー装置は他のビデオ会議ベンダーでは通常、登録可能台数や同時に通話できる台数などで価格が変わるが、Visual Nexus ではゲートキーパーは Meeting Server の標準機能となっており、Meeting Server の価格体系は、MCU に同時に接続する数に応じて決められている。「Meeting Server は、MCU、T.120 データ会議、ゲートキーパー、会議予約システムを含めこれだけの高機能でありながら、コストパフォーマンスの高い価格比を持っている。ユーザーにはメリットが高いと思う。」(同 丸田氏)

Secure Transport - ファイア・ウォール / NAT への対応

Visual Nexus は、企業での H.323 の導入で必ず問題になる、ファイア・ウォールと NAT の問題に対応している。

H.323 のビデオ会議端末を使ったインターネット越えの通話には Secure Transport を使う。端末にグローバルの IP アドレスを割り当てることなく、端末をファイア・ウォールや NAT の内側にプライベートの IP アドレスを割り当てた状態でインターネット越しの通信ができるため、運用面でもセキュリティ面でも利便性の高いソリューションである。

Secure Transport も、Visual Nexus システムの一部として稼働するソフトウェアある。他社の同様な製品との違いは、別途ゲートキーパーなどの装置を購入する必要がないことだ。

「Secure Transport は、H.323 トンネリングという技術を使ってどの H.323 ビデオ会議端末でも、プライベート IP アドレスを使ってファイア・ウォール / NAT 越えの通信を可能にするソリューションだ。そのためのゲートキーパーなどの別のハードウ

エア装置の購入は不要。Secure Transport を各拠点に準備するだけだ。」(同 丸田氏)

Secure Transport システムでは、ファイヤ・ウォール内のプライベート IP 環境に設置されたビデオ会議端末から、公衆インターネット回線を越えて他のプライベート IP 環境にある、H.323 ビデオ会議端末との間に H.323 通信専用のトンネルを通すことでこの二つの拠点間でのビデオ会議を可能にする。

企業でビデオ会議を導入する際にシステム管理者にとって懸念となるのは、H.323 ビデオ会議端末の通信は通信に当たってファイヤ・ウォール上の多数のポートを使う点にある。このため、セキュリティの管理に厳しい企業ではビデオ会議端末にプライベート IP アドレスを割り当てて運用することがなかなか難しいのが現状である。しかし、Secure Transport を使用するとシステム管理者は最も少ない設定では任意のポート一つだけを指定して、Secure Transport での通信に割り当てることで、ファイヤ・ウォール/NAT を越えたビデオ会議通信が可能になるという点が画期的である。また、Secure Transport によるインターネット経由の通信は、128 ビットから 256 ビットの強度で AES による暗号化を行うことができる点も大きな特徴だ。

ファイヤ・ウォールは、ネットワークの外から内側への不要な通信を遮断し、内側から外への通信を管理することが基本的な機能であり、内側から外に向かっての通信のリクエストとそれに対するレスポンスについては、外から内側への通信を許可するといったようなルールを設定できる。Secure Transport の H.323 トンネリング技術はこのファイヤ・ウォールの基本的なルールに則り、H.323 ビデオ会議端末

同士の通信を一つのポートを使った通信にまとめ、ファイヤ・ウォールへリクエスト/レスポンスの仕組みに沿って各拠点間

の双方向通信を可能にしている。

丸田氏は、仕事で使うモバイルノート PC に Visual Nexus のクライアントソフトと、その Secure Transport クライアントをインストールしているという。この環境を持ち歩くことで、たとえば自宅や出張先などからインターネットを介して Secure Transport で暗号化を

かけて MCU に接続し、社内のメンバーとビデオ会議を行っているという。(写真上：トーマンサイバービジネス丸田氏(右)と編集長橋本)

「端末自体が AES をサポートしていれば、それはそれでよいが、暗号化に対応していない端末も Secure Transport で暗号化ができるのがよい点。また、Visual Nexus クライアントソフトとアカウントを提供すれば暗号化の環境ですぐにビデオ会議ができる。インターネットの契約をするだけで簡単にビデオ会議が行え、大きなコストダウンができる。」(同 丸田氏)

トーマンサイバービジネスでは、インターネットに公開サーバーを立てているため、リクエストに応じてユーザーの環境からいつでもデモを行える環境を構築している。

Meeting Manager - プレゼンス機能

「プレゼンス機能は、Visual Nexus 3.0 のポイントになっている。プレゼンス機能を新たに搭載した Meeting Manager は企業の社員ひとりひとりが自席から使う、新しいコミュニケーションツールという風に考えている。そこで使って頂くために重要



なのが、プレゼンスという考え方。自席から使うとは、すなわちメールや携帯電話、グループウェアと同列で扱われる。プレゼンスは、必須のツールではないかと考えている。」(同 丸田氏)

バージョン 3.0 から、プレゼンス機能が追加され、Visual Nexus の専用クライアントである Meeting Manager 以外にも H.323 端末のプレゼンスについてもリアルタイムに把握することができるようになった。

丸田氏によると、実際に社内で Visual Nexus を使っているが、プレゼンスによってビデオ会議の使用頻度はぐっと上がっているという。ビデオ会議を始めるまでのステップ、つまり通話を始めるまでの手順が短いのですぐ話をしようとする気になる。「社内で見かけた同僚に声をかけてちょっと相談するような感覚でビデオ会議を行える。」(同 丸田氏)

プレゼンス機能 - 使い方

まずは、PC のデスクトップにある Meeting Manager のアイコンをクリックし、立ち上がってきた画面に最初にアカウント ID とパスワード、つまり自分の権限でログインする。

このログインの過程は設定により、毎回の入力を不要にすることもできる。ログイン後の初期状態は、自分がアクセスできる会議室の一覧がでてくる。見える会議室は、その人の権限によって変わってくる。権限とはどこまでのメニューを操作できるかということ。上記の例でいくと、役員用の会議室には、一般社員はアクセスできないということ。あるいは、別例では、システム管理者のメニューには、一般ユーザーはアクセスできないなど。

また、自分がよく話す人をプレゼンスに登録しておくと、オンライン、オフラインの人がいたりする状態が見える。オンラインとは、Visual Nexus にログオンしている人のことを指す。

そのプレゼンスに表示している人と話をしたいのであれば、名前をダブルクリックするだけで通話ができる。相手には、“着信がありました”という表示と共に着信音で着信を

知らせることができる。相手が着信を受けるとすぐに映像・音声・データを使った通話を開始することができる。

使ってもらえるコミュニケーションツールとするために - プレゼンスの役割

「参加者が 7~8 人以上集まって行う会議というのは、人それぞれがばらばらにもっている情報を一回束ねて、全員の知識にするために行うといったように「目的」が明確に設定された上で開催されることが通常である。この場合、この会議自身は、仕事を進行させるための共同作業の場ではなく方向性をさだめ、軌道修正や善し悪しの判断を行うために行う性格が強い。その後その会議の参加者、例えば A さん、B さん、C さんは会議の場で確認された情報や方針に基づいて作業を行うわけだが、その途中で A さん、B さん、C さんはちょっとした相談などやりとりをしながら実際の作業は進行してゆく。このときお互いの都合のすり合わせやニュアンスを伝え合うような細かいコミュニケーションの積み重ねによって実際の仕事はスムーズに進行していくわけだが、このちょっとしたコミュニケーションのきっかけをすくい取るのが、プレゼンス機能の役割だと思う。同じオフィスの同じフロアにいる環境の場合、たまたま通りがかった人を呼び止めて声をかける、用件を伝えるなどの「偶発的」なコミュニケーションが発生することは日常的にあることだが、これと同じような「偶発的」なコミュニケーションを離れた拠点やオフィスの別フロアにいるメンバー同士の間には発生させることができるのが、プレゼンス機能の大きな特徴である。

Face to Face の密度の濃いコミュニケーションを図ることができる点が特徴であるビジュアルコミュニケーションのツールを「会議」の場だけで使うのではなく、離れた場所にいるユーザー同士の日常的な細かいコミュニケーションのツールとして利用していただくためには、オフィスで使われている PC のデスクトップで使えることと、このような「偶発的」なコミュニケーションを違和感無く実現する仕組みが必要と考えている。

従来テレビ会議と呼ばれていたような会議室に備え付けて

あるような、テレビ／ビデオ会議は情報を共有するための会議に利用されることが多く、ユーザーによっては利用頻度などの面から費用対効果が期待していたほど高くないと評価するユーザーもある。その企業のメンバーが、ひとりひとり、どんどん使うことによって効果が現れる。そこではプレゼンスがキーになる。」(同 丸田氏)

ビデオ会議用端末の価格が下がってもなかなか利用が広がっていかない背景には、端末が会議室の設備として購入され、ユーザー一人一人にとってビジュアルコミュニケーションが日常の業務の流れに根付いていないことが考えられる。個人レベルで使えるツールになって、個人レベルで利便性を感じられないと、定着はしていかないと丸田氏は考える。

「そのブレークスルーをどう作るのか。システムを運用する立場からは、エンドユーザーにどう使ってもらうか、製品を提供する側からすると、どう使いやすい製品にするか、どのように利便性を実感してもらうかが課題。いかに使いやすい場面を容易にするか、それに乗って使うことによって効果が実感できるか。プレゼンスは、ユーザーが使い始めるまでのハードルを下げるひとつの大きな仕組みだと思う。エンドユーザーにとってさらなる使い勝手のよさを提供できればと思っている。」(同 丸田氏)

Visual Nexus が提供するデータ会議

「Visual Nexus が提供するデータ会議の仕組みは高い機能をもっている。」(同 丸田様)

Visual Nexus バージョン 3.0 では、Microsoft Office のドキュメントなどを共有するための機能を強化している。ユーザーからの要望から改善を行ったという。スライドの同期をよりスムーズに行えるようにし、ページでジャンプし、話をしている際に書き込みをしたいという要望がでてきて、資料の上に書き込みをするとすぐに参加者全員の画面に反映できる機能加えた。資料を一方的に見ているだけでなく、参加者からのフィードバックをリアルタイムに反映できるため、

資料をつかった打ち合わせにさらなる双方向性が加わり、情報伝達の密度が上がった。

「最近のトレンドで重要になってきた、映像、音声、データの統合へ向かう IP コンバージェンス。各ビデオ会議、データ会議、VoIP ベンダーなどが皆そこに向かって走っている。Visual Nexus のアドバンテージは、映像、音声の品質と高度なデータ会議機能。バージョン 1.0 から映像・音声の品質は高いと評価を得ている。そしてデータを共有する機能についてはバージョン 3.0 に至るまでに強化してきた。

特徴的な利用事例

JA 全農では80拠点をつないだ Visual Nexus でのビデオ会議を行っている。B-FLETS の光接続サービスを使い Secure Transport を利用してインターネット経由でビデオ会議をおこなっている。導入前は、ISDN でビデオ会議をおこなっていて、従量課金のためコストがかかっていたという。各拠点を専用のサービスで結ぶ IP-VPN ではなく、B-FLETS などの光インターネット接続サービスを利用することで通信コストは大幅に下げながらも、Secure Transport があるため、セキュリティが保てている。

JA 全農では、年に何回か全拠点接続でのビデオ会議ミーティング。そして、日常的に様々な部署や地域を越えて会議や研修をおこなっているという。

「使用頻度が上がったということで喜ばれている。従量課金は気軽には使えないため運用に歯止めがかかってしまう。Visual Nexus で通信コストは固定になっている。導入の担当者様からはいい買い物をした、と言っている。」(同 丸田氏)

JA 全農では、Visual Nexus 導入前に利用していた ISDN 回線を使ったビデオ会議サービスでは従量課金で年間 3700 万円の費用がかかっていた、年々増加するコストが課題となっていた。今回 Visual Nexus を導入するに当たって、システムを内製化し、回線を全てインターネット回線に変更することで、システム変更の初期費用はかかっているが、5 年間で 7900

万円のコスト削減を見込んでいるという。JA 全農ではビデオ会議は、毎日利用されているため、今後のプランとしては、Visual Nexus を利用できる拠点を増やしていこうという話もある。

「MCU というものを中心にして大規模のビデオ会議システムを構築したいというニーズに、我々のマルチベンダサポート対応と、MCU の開発ノウハウは生きている。去年は、大規模の話は多く、流通小売業での大規模案件がある。JA 全農様の他、ダイワボウ情報システム様で80拠点、また、350拠点で使っているお客様もある。何百店舗もあるような多拠点展開を行う企業ではビデオ会議ツールのように多数の拠点に対して瞬時に情報を共有できるようなツールがないと成り立たない。日々競争で移り変わっていく業界の中でいかにすばやく大規模な組織を動かしていくかということを見ると、ビデオ会議を活用するそれだけの必然性がある。このような我々の提案内容や、製品の性能についてのコストパフォーマンスを評価していただき導入していただいた。このような事例を重ねていくことでユーザーレベルの要望をどんどん取り込んでおり、過去3年間大規模案件獲得してきて自信もある。」(同 丸田氏)

また、システム導入だけでなく、Visual Nexus の認定代理店であるオールネットコミュニケーションが、Visual Nexus のASP サービスを開始した。ASP の良いところは、初期導入費を低く抑えて、Visual Nexus の機能を使用できる場所にあるので、社内へのシステム導入を検討するよりも気軽に Visual Nexus の機能を使った環境を構築することができるようになった。

競争環境の変化

丸田氏は、これから市場でのライバルがどんどん変わっていくと見る。当初ビデオ会議専用端末のメーカーがいる中で、我々の価値をどのように築いていこうかという観点から、その最初の1歩は、高性能な MCU を作るということから始まった。

「ビデオ会議市場としてみると、なかなか市場が育たない。ちょっと視線を引くとその市場の外側に非常にポテンシャルはあるのではないかと。ビデオ会議の近接市場は IP 電話やデータ会議のカテゴリー。将来的には、VoIP のシステムを提供しているベンダーとの競合やあるいは協業体制になってくるのかもしれない。Visual Nexus は、このような環境の変化に際してもビデオ会議の畑から来ているので音声、ビデオについてのノウハウの蓄積があると自負している。また、大規模な多拠点でのノウハウがある。これらの我々が持っているアドバンテージを活かしつつ今後の環境の変化の中、常にユーザーへの新しい機能・利便性の提供や使い方の提案を行っていきたいと考えている。」(同 丸田氏)

(プロダクトレポート終わり)

連絡先

トーマンサイバービジネス株式会社
インターネットプロダクツ事業本部
ビジュアルコミュニケーショングループ
Tel. 03-5715-0821
E-mail: info-jp@visualnexus.com
URL: <http://www.visualnexus.com/jp/>

取材・編集 CNA レポート・ジャパン
編集長 橋本啓介